様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　８ 月 ３１ 日現在

機関番号：３４４３２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０４６１８

研究課題名（和文）在宅死を支える「看取り教育」プログラムの新規開発

研究課題名（英文）New education program of end-of-life in home care

研究代表者
日吉　和子（HIYOSHI, Kazuko）

太成学院大学・看護学部・教授

研究者番号：８０７６０２４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：日本は今後、家族による在宅での看取りが増加することが考えられるが、世界的にみて看取りに関する教育は皆無である。そこで本研究の目的は、一般成人を対象とした「看取り教育」プログラムを開発することである。
研究の方法として在宅看取りを行った家族介護者を対象にインタビュー調査を行った。半構造化面接を行い、看取り時に必要だった知識等を質問項目とした。データは内容分析を用いた。結果として、①身体的変化、精神的変化について知りたかったことを示し、②恐怖感情が無い場合の看取りでは、死後世界観が関連していることを示した。この結果をもとに教育プログラムの媒体を動画にて作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究により、在宅看取りを行う家族には、恐怖感情があることが示され、恐怖感情低減のためにも亡くなる前の身体的・心理的変化についての情報提供が必要であることが分かった。特になるくなる前の呼吸の変化や食事量、尿量の変化について示すことも必要であることが分かり、それをもとに動画を作成し、情報を発信した。動画作成に当たり、訪問看護師及び在宅看取り経験者の意見をもとに、心理的負担を掛けないような動画作成を行い、人生会議をしたみようと思える動画とした。全く恐怖感情がない看取り家族では、死後の世界観が大きくかかわっており、死生学の醸成が必要であることも示すことができた。

研究成果の概要（英文）：In Japan, the rate of end-of-life care at home by families will increase in the future. But there is no education to to in the future in the world. The aim of this study is to develop an to new education programs of an "end-of-life care education" for adults. We used a method interview and semi-structured interviews were conducted. The subjects were family caregivers who had provided end-of-life care at home. The contents were about knowledge needed at end-of-life care in home. Content analysis was used for analysising. We indicated that (1) they wanted to know about physical and mental changes, and (2) in the absence of fearful feelings, their view of the afterlife was relevant in end-of-life care. Based on these results, an educational program medium was created at video.

研究分野：教育学

キーワード：在宅死　看取り　家族　生涯教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
日本の超高齢社会は、今後の医療費の高騰が問題となっている。そのため厚生労働省は病床を削減し、「在宅死」の割合を現在の 15%から 40%まで引き上げる目標を出した。今後は家族による在宅での看取りが増加することが考えられるが、世界的にみて看取りに関する教育は皆無である。生涯教育の一環として、看取りに関する教育は重要であり、日本においては急務の課題である。

２．研究の目的

本研究の目的は、一般成人を対象とした「看取り教育」プログラムを開発することである。また、看取る者の「死への恐怖」は精神的負担に関連しているため、看取り教育の評価は「死への恐怖感情」の低減について心理尺度を用いて評価することであった。
３．研究の方法
1)「在宅で看取った時に必要だった知識」についてインタビュー調査を行う。
a.被験者
被験者は、看取り経験のある者を対象とする。研究分担者ベッカー教授が行った「在宅での看取りと悲嘆」研究に参加された看取り経験のある高齢者施設入居者の元在宅介護者にお願いをした。更に A 市にご協力いただき、在宅看取り行った家族介護者をご紹介いただけた。
b.被験者数；成人 25 人
c.インタビュー方法と分析
半構造化面接を行う。看取り時に必要だった知識等を質問項目とする。データは同意を得た上で録音した。データは内容分析を用いて、①身体的変化　②精神的変化について検討した。更に③介護者の男女差を比較した。インタビュー調査より全く看取りの恐怖がなかったものを対象として SCAT(Steps for coding and theorization)を用いて分析を行った。

2) 教育プログラムの媒体作成
1)より、教育プログラムの内容について下記を決定した。視覚的に学べるように、動画を自費で作成し、YouTube にアップした。特に身体的変化について特に着目し、特に人生会議をしようと考えられるように作成した。
撮像スケジュールは以下のようである。
・病院の場面で、患者は医師から「ガンの治療方法がもうない」と言われる
・家族で自宅に帰るか緩和ケア病院に移るかの話しあいを行う
・家に帰りたいと患者が意思表明をする
・訪問看護師が病院に訪問する
・自宅へ帰る
・呼吸の変化
・食事の変化
・尿量の変化
・介護者の体の気遣い
・買い物を行っている時に息を引き取る
・臨終
・家族での思い出場面

動画完成前にプレインタビューを行った。対象は訪問看護師 2 名、在宅介護経験者 2 名、一般成人 1 名を対象とした。看護師からは、①誤嚥など気を付けたいので、顔の角度について強調する、②在宅死は看取る方にとってプレッシャーになるので病院で亡くなってもいいというコメントを入れた方がいいと助言があった。在宅介護経験者からは、「動画通りの身体症状の変化があったので、もっと早く見たかった、心の変化の動画もあった方がいい」という発言が聞かれた。一般成人からは、人生会議の必要性がわかり、考えさせられたと発言が聞かれた。
　上記をもとに編集をし直し、完成とした。特に変更で注意した点は、①誤嚥について②病院で看取る可能性もあっていいこと③熱が高い場合などは点滴をすることがあること④顔の色が様々になることを文字として動画内に追記した。

４．研究成果

1）内容分析を用いて、①身体的変化②精神的変化について検討した。また③介護者の男女差を比較した。更に④インタビュー調査より全く看取りの恐怖がなかったものを対象としてSCAT(Steps for coding and theorization)を用いて分析を行った。

①身体的変化については、『最後の時にどのように身体が衰えるか分からなかった不安』『呼吸の変化について驚いた』『食事について分からなかった』『尿量について分からなかった』の4項目が上がった。②精神的変化については、『介護者が患者の死にゆく状態を受け入れられなかった』『患者が死について受け入れられずにいた』『最後まであきらめない気持ち』『とうとうこの時がきたという絶望』の4項目があがった。③男女差においては、看取り後の事務手続きがどうなるかが分かってなくて難しかったということが男性の方で多く発言されていた。④恐怖を感じない在宅での看取りに関して，(1) 死後も生きているという他界観 (2) 自身の他界観を大切にしてくれる担当医の存在、(3) 治療の自己選択・拒否権、(4) 診療所へのアクセスのしやすさ、の理論記述が現れた。在宅看取りの場合、介護者の他界観を無視するよりは推奨するほうが不安を低減する可能性があることを示唆した。

2）教育プログラムの媒体作成

インタビュー調査を基に、知りたかった知識についての身体的変化について情報が提供できるように動画撮影を行った。

特に、点滴なども何もしない看取り、つまり戦前に行われていた看取り方法について示すこと、看取り時になかなか行けないと言われていた買い物に行ってる間になくなっているという場面にすることで、死は自然なものなので、ずっとそばについてなくても良いことを表現した。

５．主な発表論文等

①雑誌論文

1. 日吉和子，ベッカー・カール，福山秀直，大石直也．在宅での看取り～恐怖を感じない家族の看取り～．癌と化学療法，46：84-86，2019．査読あり

②学会発表

1. 日吉和子．「お迎え現象」に関する終末期看護ケア～論文レビューに基づいて～．第41回日本看護科学学会学術集会，2021．12，愛知．
2. Hisyoshi K, Becker C, Oishi N, Fukuyama H. A Review of Effects of Death Anxiety on the Human Brain Activity. World Congress of Neurology, 2017. 9, Kyoto.
3. 日吉和子，飛田弥咲，カール・ベッカー．認知症患者の終末期ケアに関する文献レビュー～在宅死を可能にする要因の検討～．第28回日本在宅医療学会学術集会，2017．9，東京．

③その他

在宅看取りの動画 YouTube
https://youtu.be/BQZBrizufws

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 大石直也	４．巻 42
２．論文標題 MRS (magnetic resonance spectroscopy)	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ペインクリニック	６．最初と最後の頁 611-616
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大石直也	４．巻 42
２．論文標題 機能的脳画像法の原理	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ペインクリニック	６．最初と最後の頁 597-602
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Becker, Carl.	４．巻 11
２．論文標題 Prioritizing Sustainable Living	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Pacific Asia Inquir	６．最初と最後の頁 176-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ベッカー カール，吉野 由美子，髙橋 政代，三宅 琢，和田 浩一，武田 志津，沖田 京子	４．巻 103
２．論文標題 人生の意味を探る対話 ： QoLからみたインクルーシブな医療と社会 ： 社会イノベーションをめぐる考察	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日立評論	６．最初と最後の頁 300-305
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 ベッカー・カール	4．巻 3402
2．論文標題 「日本における「続く絆」の重要性」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 医学界新聞	6．最初と最後の頁 11-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Becker, Carl.	4．巻 9
2．論文標題 Reducing the high social cost of death.	5．発行年 2021年
3．雑誌名 KyotoU Research News (Kyoto University) Winter 2021	6．最初と最後の頁 16-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 日吉和子 ， ベッカー・カール ， 福山秀直 ， 大石直也.	4．巻 46
2．論文標題 在宅での看取り～恐怖を感じない家族の看取り～	5．発行年 2019年
3．雑誌名 癌と化学療法	6．最初と最後の頁 84-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 カール・ベッカー	4．巻 14
2．論文標題 看護に活かせる日本人の死生観	5．発行年 2019年
3．雑誌名 仏教看護・ビハーラ	6．最初と最後の頁 16-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hiyoshi, K, Becker, C, Kinoshita A.	4．巻 41
2．論文標題 What behavioral and psychological symptoms of dementia affect caregiver burnout?	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Clinical Gerontologist.	6．最初と最後の頁 239-254
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/07317115.2017.1398797	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 日吉和子，ベッカー・カール，福山秀直，大石直也.	4．巻 40
2．論文標題 在宅での看取 り 一恐怖 を感 じない家族の看取りー	5．発行年 2019年
3．雑誌名 癌と化学療法	6．最初と最後の頁 87-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hiyoshi-Taniguchi K, Becker CB, Kinoshita A.	4．巻 41
2．論文標題 What Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia Affect Caregiver Burnout?	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Clin Gerontol.	6．最初と最後の頁 249-254.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 日吉和子
2．発表標題 「お迎え現象」に関する終末期看護ケア～論文レビューに基づいて～.
3．学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4．発表年 2021年

１．発表者名 Kazuko Hiyoshi, Carl Becker, Hidenao Fukuyama, Naoya Oishi
２．発表標題 Gender Difference in End- of Life Caregiving
３．学会等名 WONCA 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 日吉和子
２．発表標題 死の恐怖 看送る人を理解する為に
３．学会等名 第38回日本看護科学学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 日吉和子，ベッカー・カール，福山秀直，大石直也.
２．発表標題 在宅での看取り～恐怖を感じない家族の看取り～
３．学会等名 第29回日本在宅医療学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hiyoshi K, Carl B,Oishi N, Fukuyama H.
２．発表標題 A Review of effects of death anxiety on the human brain.
３．学会等名 World Congress of Neurology 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 日吉和子，飛田弥咲，カール・ベッカー．
２．発表標題 認知症患者の終末期ケアに関する文献レビュー
３．学会等名 在宅医療学会学術集会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大石　直也 (Oishi Naoya) (40526878)	京都大学・医学研究科・特定准教授 (14301)	
研究分担者	ＢＥＣＫＥＲ　ＣＡＲＬ．Ｂ (Becker Carl) (60243078)	京都大学・政策のための科学ユニット・研究員 (14301)	
研究分担者	福山　秀直 (Fukuyama Hidenao) (90181297)	京都大学・充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成リーディング大学院・特任教授 (14301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関